

障害者週間連続セミナーに参加して

西部地域障がい者就業・生活支援センター
管理者 藤原 勇治

1月7日、8日の2日間、有楽町朝日ホールにて、内閣府が主催する障害者週間の企画として、全国手をつなぐ育成会等の8団体が主催の連続セミナーが実施され、私が参加したセミナーは、2日目に開催された全国手をつなぐ育成会連合会が主催したもので、「糸賀一雄思想『この子らを世の光に』とともに共生社会の実現に向かう」をテーマに、シンポジウムが行われました。



シンポジウムは、全体の進行を毎日新聞論説委員の野澤 和弘氏が担われ、シンポジストとして、全国手をつなぐ育成会連合会の久保 厚子 会長、公益財団法人糸賀一雄記念財団(滋賀県草津市)理事長の辻 哲夫氏、社会福祉法人北摂杉の子会(大阪府高槻市)理事長の松上 利男氏、社会福祉法人ゆうゆう(北海道石狩郡当別町)理事長の大原 裕介氏の4氏で、それぞれの実践の報告も交えて、6つのテーマに沿って、議論が進められました。

1つ目のテーマは、『相模原事件をあらためて考える』についてでした。久保氏、辻氏、野澤氏からそれぞれ発言がありました。冒頭、野澤氏からテーマ設定についての背景と主旨の説明があった後、久保氏から、事件直後に育成会が出した2件の声明文と親の立場からの思いが話され、今回の事件は、犯人自身の人格的な問題に合わせて、社会環境にも原因があるのではないかと分析されていました。辻氏からは、社会にギャップが広がっているとの指摘があり、「人の尊厳」についてコミュニケーションが不足しているとの指摘がありました。

2つ目のテーマは、『命の重みと優生思想』についてでした。野澤氏から、社会の格差・分断・優生思想などの視点が示され、それに対し、久保氏、辻氏の両名から、命、存在の価値をどう見るか、共感が必要、「命は一緒」という意見がありました。

3つ目のテーマは、『共生社会のイメージ』につい

てでした。ここでは初めに、大原氏から、社会福祉法人ゆうゆうの設立の経過や、ご自身の実践の中から、障がいがある方を地域の中で可視化していくという表現での報告があり、北海道当別町では、市民が法人のボランティア活動に様々な立場で参加していること、そのことが、町の中に新たな雇用や仕事を生み出していること、障がいがある人や、高齢者が、単に支えられる存在ではなく、支える側として役割を持っていることなど、非常に興味深い報告がありました。福祉では、障がいの有無・種別・年齢も関係なしで、困っている人に何が必要か、何ができるかをベースに展開されている実践には、感銘を受けました。この報告に対して、久保氏からは、一人の命、付き合っていくことが必要と感想を話され、辻氏からは、安心して、住み心地の良い豊かな社会の実現、みんなが地域で役割を持って支え合うことが大切であると感想が述べられていました。まとめとして、野澤氏から、その人のできることを見て、その力を活かして解放されていく(かけがえのないひとりの人として生きていく)方向性が大切であるとのコメントがありました。

4つ目のテーマは、『密度の濃い支援を必要とする人たち』についてでした。松上氏より、北摂杉の子会で運営しているグループホーム「レジデンスなさはら」での実践報告がありました。「レジデンスなさはら」は、非常に支援度の高い行動障がいのある人たちが暮らすグループホームであるが、様々な環境整備や工夫、配慮を施し、日々の生活が豊かに・安心して送れる仕組みを作り出しています。松上氏の言葉で印象的であったこととして、アメリカのノースカロライナ州のアルバマールに活動拠点のあるGHA(Group Homes for the Autistic, Inc)の実践からとして、「ほとんどの行動的な課題は、環境で解決できる」と紹介され、特に重い行動障がいのある方の支援には、包括的な支援システムと、余暇支援が重要であると話されていました。また、安定した豊かな暮らしのためには、役割・見通し・理解してくれる人がいることが必要であるとのことでした。視覚支援による見通しの構築の意味は、自発的な行動を引き出すことが一番の意味であると話されました。また、それはあくまでも「質の高い暮らしを提供する」ためのプロセスであると強調されていました。その他にも、GHAの実践の紹介の中で、「ニーズの変化で支援も変わる」と言う言葉や、IT技術を使用し、医療との連携を図れるような体制の中で、“看取り”ができる環境をつくることを目指していることな